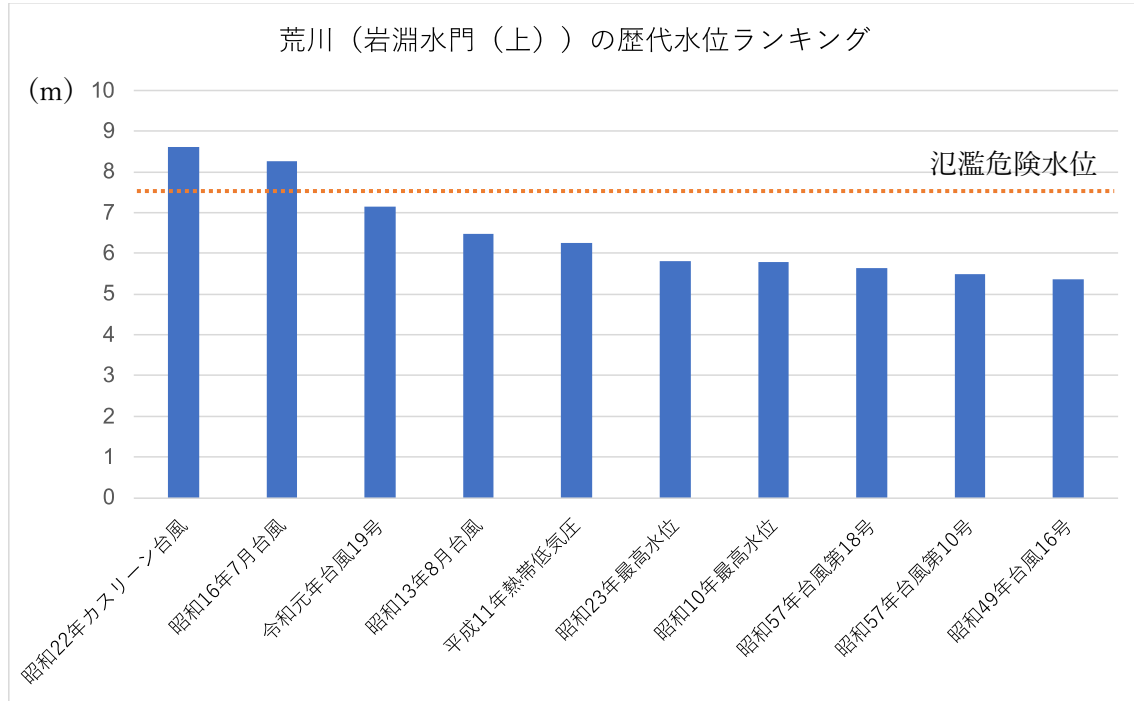


荒川のこれまでの災害とこれから

以下の図は荒川の歴代最高水位を示したものです。

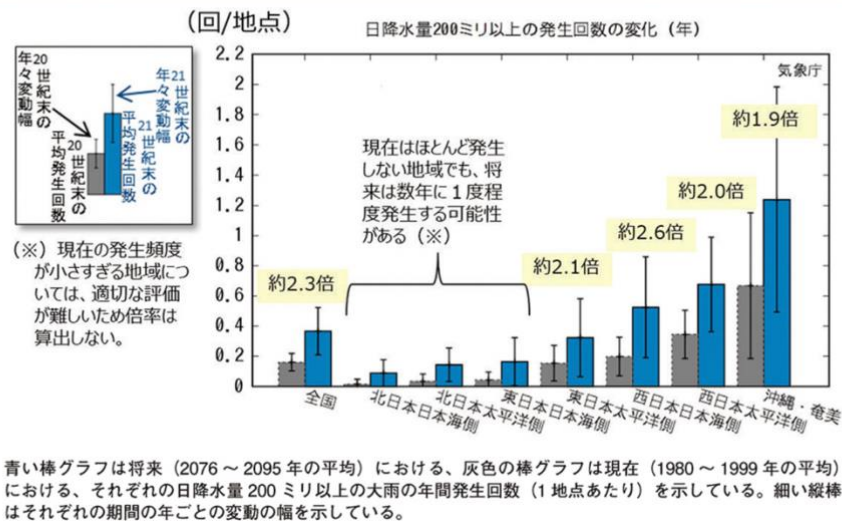


荒川のゼロメートル地帯は過去 100 年の間に、台風による大雨や高潮の被害に何度かあっています。令和元年台風 19 号では氾濫こそ免れたものの氾濫危険水位まであと 53cm まで迫り、荒川流域の水害対策が叫ばれています。

また、気象庁がスーパーコンピュータで実施した将来予測において、温室効果ガスの排出が高いレベルで続いた場合の今世紀末のシミュレーションでは、ほぼすべての地域及び季節において 1 日の降水量が 200 ミリ以上という大雨や、1 時間当たり 50 ミリ以上の短時間の強い雨の頻度が増加し、ともに全国平均では 20 世紀末の 2

倍以上になるという結果が得られており、今後更なる大雨リスクの増加が懸念されます。

日降水量 200 ミリ以上の大雨の年間発生回数の変化（二酸化炭素の排出が高いレベルで続く場合）

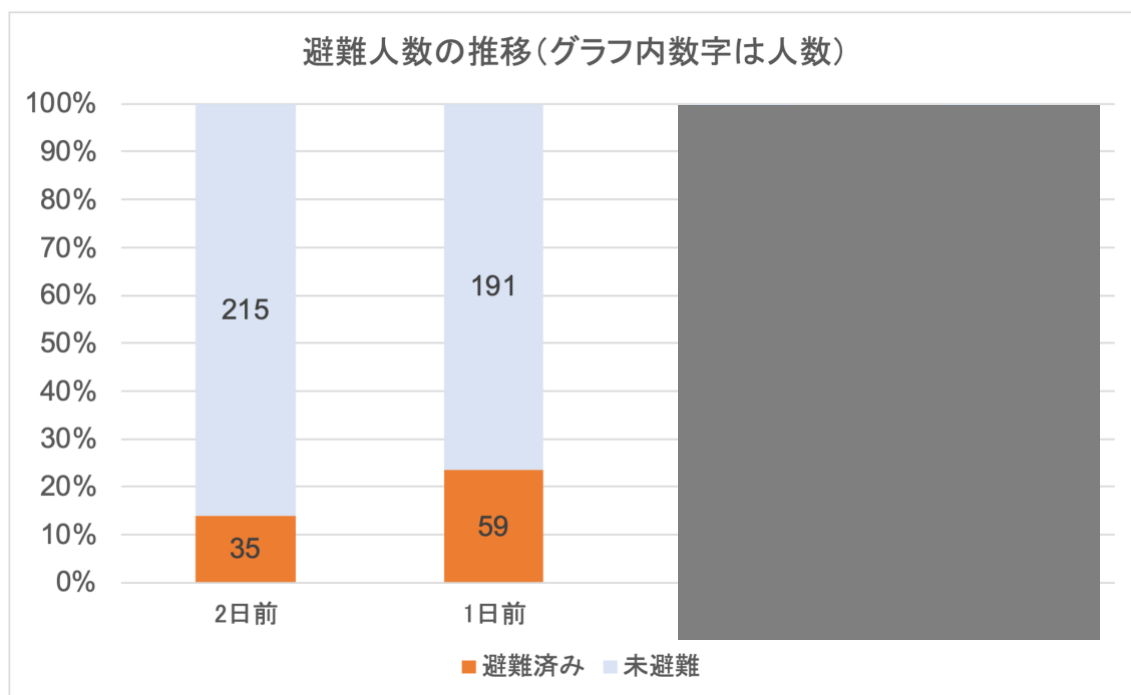


荒川の氾濫は一生に一度あるかないかの災害と考えられますが、いざという時のために自身の行動を考えておくことが自分の命を守ることに繋がります。

前回のアンケート調査の結果

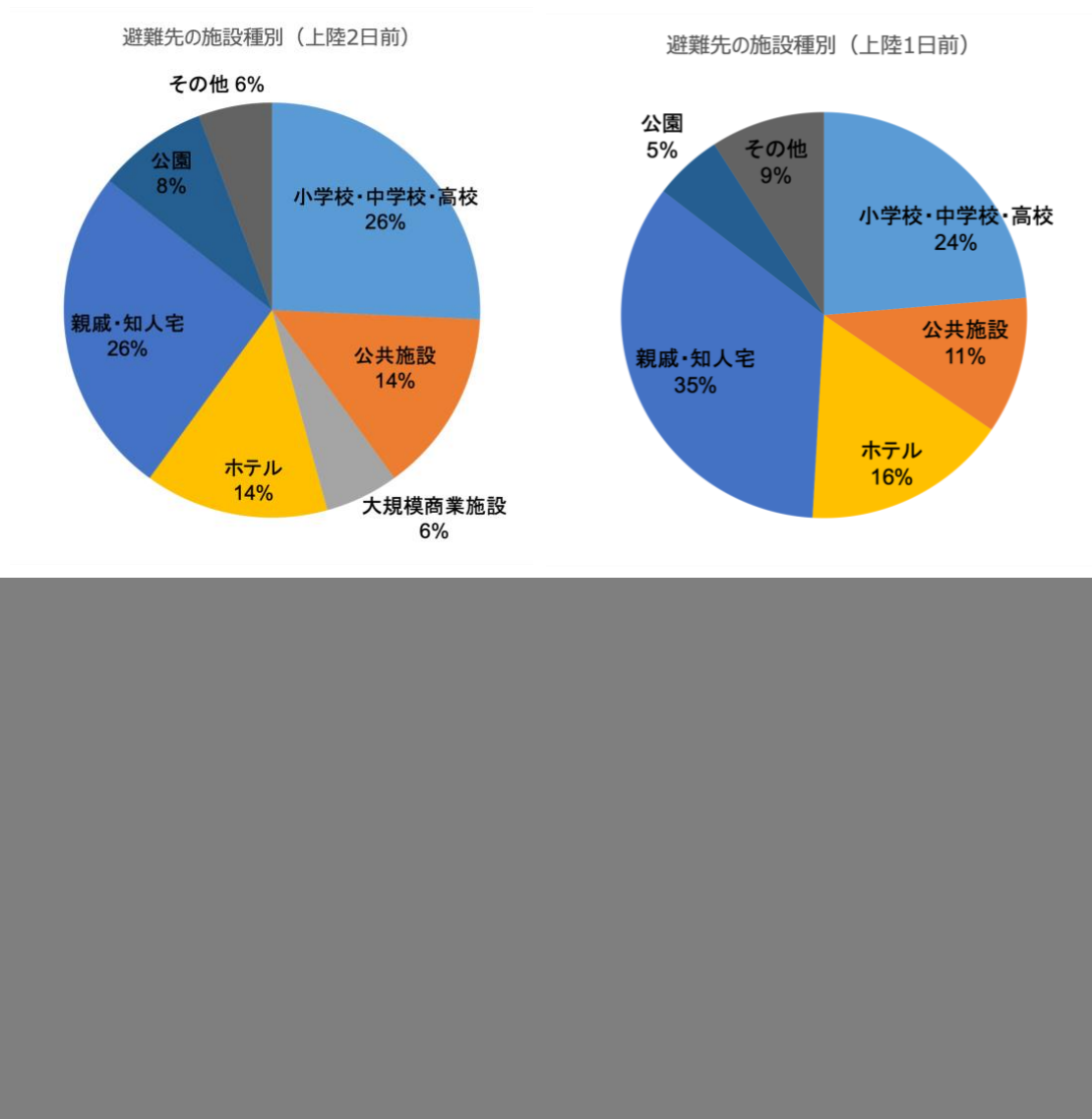
- 3月25日から29日に参加者の皆さま250名に回答いただいたアンケート調査の集計結果を紹介します。
- アンケートでは、史上最大級の台風が接近している状況を想定し、台風上陸の2日前、1日前、半日前、10～12時間前、約6時間前に避難するかをお聞きしました。
- 実験の設定上、全ての回答結果をお示ししない場合がありますがご了承ください。

各時間で「避難する」と回答した人数の推移



- 2回目のアンケート調査と比べ、「避難する」と回答した人が各時点において数名程度増加しました。
- 避難しない理由として1回目のアンケートから増加したものは、2日前：「災害発生する確率が低いと考えられる」が多く、災害の発生確率と自分の生活を照らし合わせながら避難行動を選択していました。

避難先の施設の種類



2回目のアンケート調査から変化があった点は、

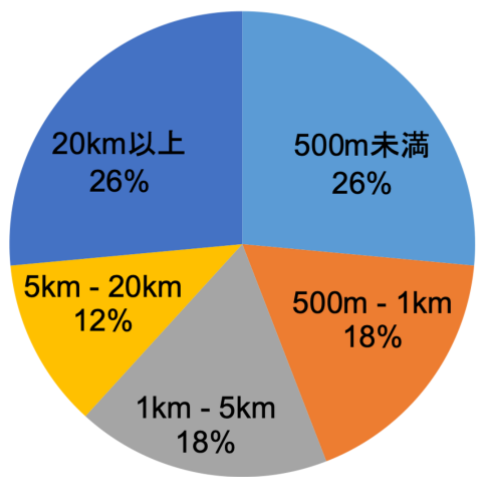
- 上陸2日前の時点で親戚・知人宅、ホテルを選ぶ人の割合が10%程度増加

台風上陸までのタイムリミットを考えながら避難先を時々刻々と変化させていることがわかります。

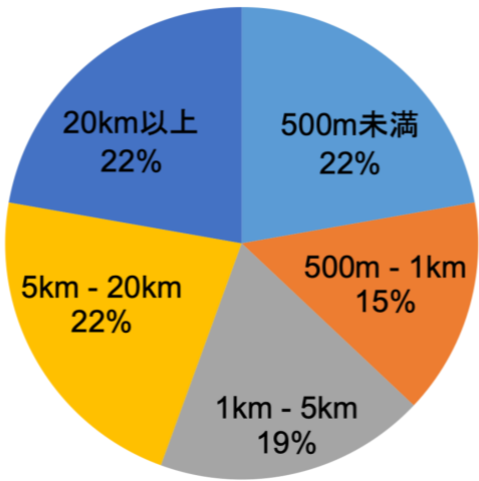
避難先までの距離

※事前に伺っていた住所とアンケート回答結果からおおよその距離を算出しました。

避難先の自宅からの距離（上陸2日前）

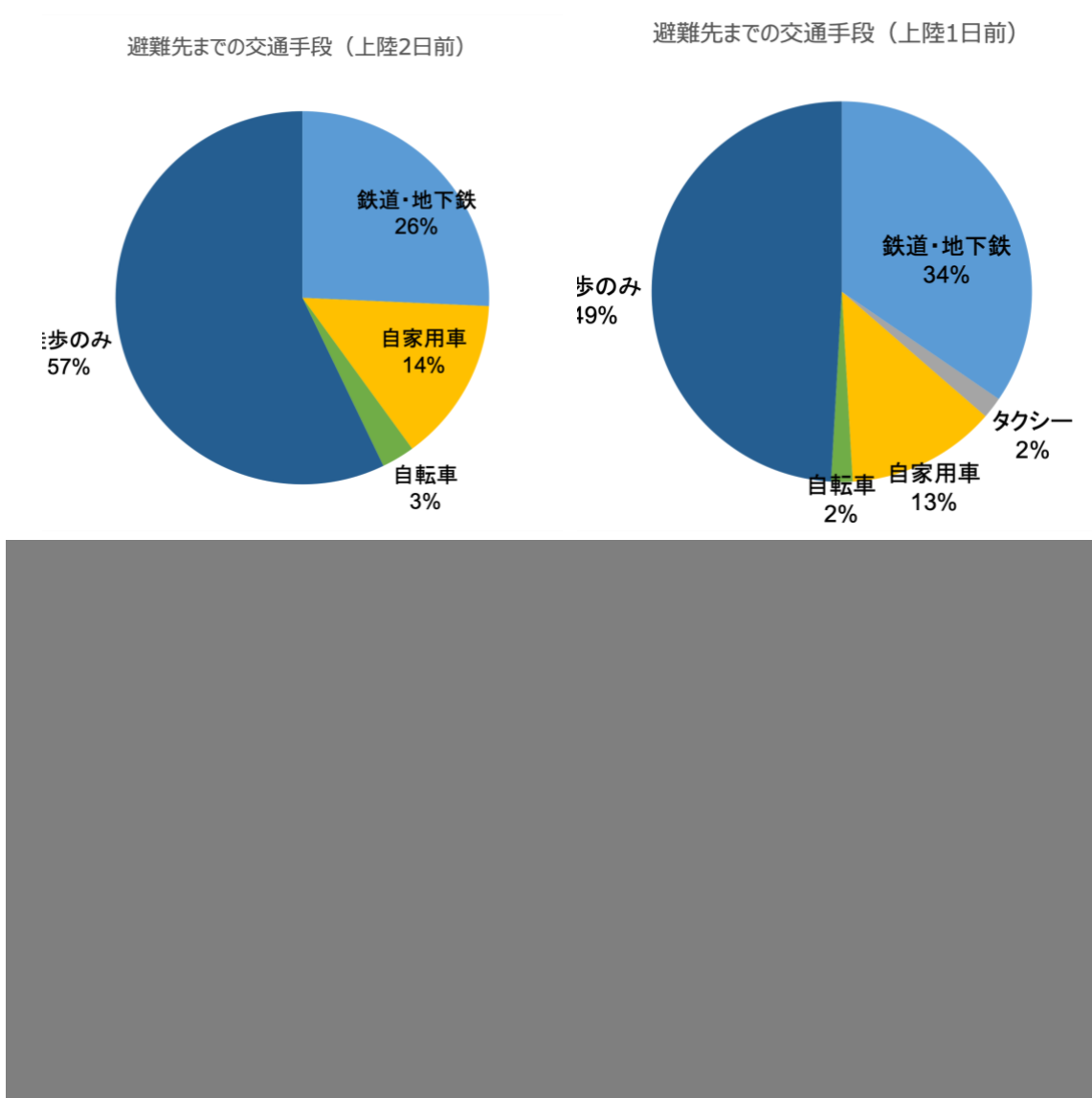


避難先の自宅からの距離（上陸1日前）



- 台風上陸2日前に自宅から1km以内の避難先を選ぶ人が8%増加

避難先までの交通手段



- 自家用車を選択する人が微減しました。
- 前回のアンケート結果を踏まえて、川を渡る橋や高速道路入り口などでの渋滞を見越して避難行動を変化させたと考えられます。

今回の配信資料は以上です。

最終のアンケート調査へのご協力をよろしくお願いいたします。

なおアンケートの回答は、お住まいの市区町村における状況を想像して回答をお願いいたします。「もし江東区に住んでいたら～」と想像する必要はありません。